

# 埼玉の夜明け

巻号 45  
第3号  
通算141号

団 体 員 会  
教 区 委 員 会  
キ リ ス ト 教 会  
日 本 東 京 社 会 社

埼玉地区「第45回信教の自由と平和を求める二・一一集会」  
集会開会礼拝説教

## されど我等の国籍は天にあり

フィリップス・一七七一

所沢みくに教会 最上 光宏

### 信教の自由と平和を求める 2・11集会

社会委員会 本間 一秀

二月一日、聖学院大学礼拝堂にて「2・11集会」が行われました。講演に先立って開会礼拝が守られました。「関東教区日本基督教団罪責告白」が為され、所沢みくに教会の最上光宏牧師が説教されました。その説教のご紹介と、講演についてのご報告を次の様に記します。



今日二月一日は、戦時中「紀元節」と呼ばれていた日です。神話上の人物である神武天皇の即位した日として、天皇を神とする国家神道の支柱となった祭日でした。敗戦後、この日は祝日から外されましたが、一九六六年、政府

は多くの国民の反対を押し切って「建国記念の日」として復活させ、今日に至っています。

キリスト教界はこれに反対して、あえてこの日を「信教の自由を守る日」と呼んで、日本の国が再び国家神道の道を歩み、戦争の過ちを犯さないようにという決意と祈りをもって、全国各地でこのような集会をもつようになりまし

た。教会が、この日を「信教の自由を守る日」と呼び、このような集会をもつようになった背後には、三つの理由があります。

一つは、あの戦時下において日本の教会は、天皇を神とする軍国主義の「国体」の中で、信教の自由を奪われ、ひどい弾圧を受けたということ。あの時代の私たちの先達たちは、その信仰の故に、口では言い表わせないほどの屈辱と苦難を経験しました。当時、第六部、九部に属していたホーリネス系の教会は、治安維持法によって、一三四名の牧師たちが検挙され四名が獄死し、三名が保釈後死亡しました。そして二六四もの教会伝道所が解散処分させられたのです。

父親を牢獄で殺された辻宣道牧師が、青森刑務所から変わり果てた父親の遺体を引き取りに行った

少年時代を回顧しながら、「キリストの教会が、国家の力によって歴史から抹消された！」と声を震わせて語られた言葉を、私は忘れることが出来ません。

二つ目の理由は、日本の教会は、あの戦時下において、天皇を神とする「国体」に飲み込まれて、神と隣人の前に大きな過ち犯したということです。「わたしのほか何ものをも神としてはならない」という主なる神の戒めにもかかわらず、天皇を神として崇め、礼拝の中において「国民儀礼」と称して「君が代」斉唱、「宮城遥拝」などを取り入れ、神社参拝を奨励するような罪を犯したのであります。それだけではなく私たちの教団は、日本が侵略したアジアの国々の教会や、そこから連れてこられた「朝鮮」や中国のキリスト者に対して、天皇崇拜や神社参拝を強要したのです。「朝鮮」の教会では、これを「偶像礼拝」として忌避したため、二〇〇名もの牧師・信徒が日本の官憲に捕らえられ、五〇数名の牧師が殉教したと言われます。日本の教会はあの戦時下にあつて「被害者」であつただけではなく、「加害者」でもあつたのです。ここに「罪責告白」の必然性があります。

教会が「信教の自由」のために

闘わなければならない第三の理由は、「信教の自由」は、人間の最も基本的な人権であるからです。人間が何を信じ、何を信じないかということは、何者によつても犯されてはならない人間の魂の自由に関することです。私たちは、キリスト者として、またかつてこの自由を奪われた「被害者」として、またさらに、アジアの兄弟姉妹たちからその自由を奪った「加害者」として、この最も基本的な自由が奪われることがないように「見張りの役割」をする責任があるのです。

私は、毎年この二月一日がくると、四〇年ほど前、金沢で体験した出来事を思い起こします。その頃、靖国神社を国営化しようとする法案が何度も国会に提出されるという緊迫した状況の中で、日本全国で、キリスト教会が中心となつてヤスクニ反対運動を展開していきました。まだ駆け出しの牧師で、政治にあまり関心のなかつた私も、このような法案が通ると、国家神道が復活し、新しい英霊（戦争犠牲者）が生み出され、幼い子どもたちが戦争に巻き込まれるかもしれないという危機感から、街頭署名や月例の街頭デモに参加するようになりました。

丁度、この二月一日のことで

す。「信教の自由を守る日」の集会后、教会の青年たちと街頭で署名活動をしていた時のことです。「猶存社」と大書した右翼の街宣車が、日の丸をたなびかせ、軍歌をガンガンと流しながら突っ込んできて、迷彩色の「軍服・軍靴」？に身を固めた三、四の「隊員」に囲まれて暴行を受けました。幸い青年の一人が手に打撲傷を負うくらいの怪我で済みましたが、署名用紙を破られ、手に持っていた画板を蹴り上げられて壊さ

れるなどの被害を受けました。私は、その時受けた暴行よりも、そのとき罵倒された言葉に大きな衝撃を受けました。彼らは私たちにこう言ったのです。「貴様らそれでも日本人か！日本から出て行けー朝鮮にでも行ってしまえー！」私は日本の国を愛し、この国が再び同じような過つた道を歩まないようにと、祈るような気持ちで署名を呼びかけていたのですが、それが「非国民」として罵倒されたのです。私は心に深い悲しみと

痛みを覚えました。(最近、これと同じような「ヘイトスピーチ」が、在日のアジアの隣人に向けて発せられていることに、心を痛めています。)

「日本から出て行け！」と罵られた悲しみと悔しさの中で、私はハッと聖書の一つの言葉に目を開かれました。そのみ言葉が、「されど我が国籍は天にあり」というフィリピの信徒への手紙三・二〇の言葉です。今の新共同訳聖書では「しかし、わたしたちの本国は

**主張**

人口二二〇〇万人の台湾のキリスト者は四%の約一〇〇万人である。教会は天主教と新教であるが、一二〇〇ある長老教会(台北市内に一八〇)のほかホーリネスや諸派も多い。台湾はかつてオランダ、スペイン、英国海軍が北の淡水に駐留していたことから、キリスト教が広がったようだ。国内には神学大学も複数あり、都市にはミッシェンスクールもいくつもある。台湾のいたるところに道教・仏教など混合の寺や廟が多く、国民の宗教心は中庸で日韓中よりも温厚な民族である。台湾で毎月二週間仕事があり、定宿そばの中山長老教会に時々出席している。大きな教会の礼拝は、台湾語と中国語の二部制が多く、日本語の礼拝も一部の教会で午後行われている。中山教会は一九三五年日本人宣教師によって建てられ台湾の文化財でもある。会員は約四〇〇名で台湾語礼拝には二五〇名が、中国語は一〇〇名が出席している。二人の牧師は気さくで、ベトナム、タイ、ミャン

マーなどアジアの新来者をもきめ細かくフォローし、暖かく迎えている。礼拝前の讃美歌練習と聖歌隊のコーラスから始まる礼拝は力強い牧師の説教に励まされる。礼拝後は毎週別館でささやかな昼食と歓談の時がある。年配者は日本語も上手く温かく声をかけてくださる。平日六日間近くの公園など二か所で毎朝福音体操が一時あり、会員と一般者が四〇人ほど集まり、祈りで終わる。昨年のクリスマス礼拝はメサイヤ前半が演奏された。二四日のイブは満員で各グループやタイ家族の歌などが演じられる。一昨年は年配者の聖歌隊を指導した。台湾語を解せないのが残念だが、大きな教会でも日本の教会のように敷居が高くなく、入りやすい。社会的活動も熱心で、台北新市長柯文哲氏の立候補決起集会がこの教会で行われた。原発新規保留と米軍基地のない平和な国の礼拝は、日本の教会の失った暖かさや至福の時を感じさせてくれる。(M)

天にあります」となっています。私は、このみ言葉を通して、重い気持ちから解放され、自由にされた気持ちになりました。キリストによって贖われ、「キリストのもの」とされた私たちは、「天に国籍をもつ」者として、この世のいかなる圧迫や中傷、非難からも解放されているのだという開放感と共に、この世に立ち向かう勇気が与えられる気がしました。

この言葉は、使徒パウロが、晩年にローマの獄中から書き送った手紙の一節です。彼は、同胞ユダヤ人たちを心から愛し、同胞の救いのために熱心に祈り仕えたのですが、どこに行ってもユダヤ人たちから妨害され排斥され、ついに暴動のために訴えられてローマにまで移送されたのです。その獄中で彼は「わたしの国籍は天にある」と語っているのです。ここに何ものにも捉われず縛られない自由なパウロの姿があります。「天に国籍を持つ」もつ私たちは、この世にあつては、常に「旅人」であり「寄留者」なのです。

戦時中の日本の教会は、あの厳しい状況の中で、「非国民」と呼ばれることを恥じとして恐れ、「より良き日本人」であろうとしました。その結果、天皇に忠誠を尽くし、積極的に戦争に協力する

「日本的キリスト者」に陥ってしまったのです。パウロの言葉で言えば「恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えず」、「国籍が天にある」ことを忘れてしまったのです。これは、私たちのこれからの大きな課題です。

最近、私たちの国は、自国の繁栄や権勢のみを求め、国家主義的傾向を強め、「平和憲法」を変えて戦争への道を急いでいるようです。再び「信教の自由」を初めてする基本的な人権が危うくなりつつあります。私たちは過去に味わった苦しみと、犯した過ちを繰り返してはなりません。「私たち」の国籍は天にある」との信仰の確信に立って、「神以外の何ものをも恐れず、勇気を持って、「平和を造り出す者」としての歩みを続けて参りたいと願います。先立ち給う主に従って。主よ、「み国を来たらせたまえ」。アーメン



沖繩からの平和メッセージ

二〇一四年一〇月四日(土) 八日(水) 七里、武蔵豊岡、川口、埼玉和光の各教会を会場にして沖繩キリスト教学院大学学生知念優幸兄の講演、「沖繩の青年の声を聞く」が為されました。この度、知念兄から辺野古での座り込みの中「埼玉の夜明け」に寄稿頂きました。

民主主義の終焉

沖繩キリスト教学院大学 Team琉球 代表 知念 優幸

昨年三月より沖繩の現状を伝えるために全国を周り、講演をくりかえしてきました。この二月初頭に旅を終え、沖繩に戻るまでの約一ヶ月の間に一五三講演、延べ八〇〇人以上の方々に沖繩の現状を伝えました。「沖繩の抱える諸問題は全国の問題である」という主張は歴史上ずっとされてきました。一八七二年の琉球侵略(琉球処分)まで遡れば、私が住む沖繩の歴史とは日本の生贄とも言えるような歩みをしています。侵略した末に言語や文化までも破壊し、本土防衛のために捨て石作戦ともいわれる戦争を沖繩に持ち運んできた。戦後は国としての主権を回復するために沖繩を米国に

差し出し、日本の復興と発展のために沖繩は二〇年間も米政府に蹂躪された。沖繩が日本に返還されて四三年の月日が流れた。一九七二年に沖繩の人々が望んでいたことは未だに実現されていない。七三・九%もの米軍専用施設は沖繩に居座り続け、多くの事件事故を繰り返している。これまで沖繩は日本のためにどれだけの血を流してきたのだろうか。どれだけの人間が米兵による事件事故に巻き込まれ、泣き寝入りさせられてきたのだろうか。すべての犠牲は日本を守るために生み出されてきたものだ。日本を守るために戦争の矢面に立たされ、米国に植民地化され、いまだでは軍事要塞とされている。南国の楽園であるように年間五〇〇〜六〇〇万人もの観光客が訪れる。ほとんどが沖繩の暗い歴史や、現在抱えている諸問題に向きもせず帰っていく。選挙権を持つ国民であれば皆がこの沖繩の現状を作り出している責任を感じて欲しい。いま沖繩県の辺野古に新基地建設が強行的に進められている。昨年の一一月には反対派の翁長氏が知事に選ばれ、一二月の衆議院選でも沖繩四区すべて反対派が選ばれた。この時点で金と権力をもって沖繩の民意を絡め取るうとする現政権の思惑は外れ、逆に新基地建設に反対する民意が

固まった。選挙を通し、県政府を動かした沖繩の民意を無視するのであれば、それは民主主義を否定するという事である。しかしながら、このような現状はほとんど認められずにいる。そのために全国を回りながら、沖繩の現状を伝える旅をしてきた。埼玉県には九月に訪れ、合計で三回の集会を持つことができた。その話がどれだけの人に響き、その中でどれだけの人が共に抵抗してくれるだろうか。私はこの旅の中で三つの「無」が日本の抱える諸問題を助長しているように思う。「無知」「無関心」「無関与」これらが今ある問題を生み出し、増大させ続けている。知識がない、関心がなく、関与したくない、そんな悪意のない暴力が社会には蔓延している。沖繩の民意が示されたなかで、新年を迎えさらに政府の強行姿勢は厳しさを増している。完全に沖繩の声は無視されている状態にある。もし、こんな日本政府の姿勢を許していくのであれば、日本の民主主義は終焉を迎える。これでもまだ「無知」「無関心」「無関与」を貫くのであれば次に被害を受けるのはその人たちだろう。少なくとも、この旅で出会った方々にはそうあって欲しくないと思っています。

地区社会委員会

「天皇制問題」学習会 「非戦平和の原点を求めて 非戦平和に生きた先達に学ぶ 小川武満伝を読む」

行田教会牧師 清水与志雄

かつてキリスト者平和遺族会世話人を務めた小川武満牧師は、わたしの伯母の先夫である。林歌子が興した北京の天橋愛隣館主事であった伯母清水星子は、父泰の満州医大での先輩であり、日本基督教会牧師であった小川武満と結婚した。わたしのアルバムには伯母夫婦と従姉妹真理子さんが一緒に写る写真が残っている。

後年、元叔父が、キリスト者として、ベトナム戦争時に、脱走米兵支援をするなどベ平連運担ったり、中曽根総理大臣の靖国神社参拝反対などを実存的に担ったことを知った。キリスト者の戦争責任問題を担うためには、わたし自身の家族の歴史としても、先達に学び、志を継承する使命があると夙に思わされてきた。『地鳴り 非戦平和の人生八二年』(小川武満著、キリスト新聞社刊、一九九五一年)は、小川武満牧師の自伝である。大陸に生まれ皇国少年として育った生い立ち、医大卒でありながら、一兵卒として志願して、地獄のような兵営生活を体験し、つ

ぶさに皇軍の実態を経験するなかで、献身を決意してゆく思想的、信仰的な解放過程が、率直に語られる。野田正彰氏による『戦争と罪責』にも取り上げられているので、教会の学びとして勧めたい。(二〇一四年一〇月一九日(日) 浦和東教会)

2・11集会講演

信教の自由と平和を求める



社会委員会 本間 一秀

開会礼拝に引き続き、聖学院大 学学長の姜尚中氏による講演「悪と愛について」から聞きました。姜氏は戦前の日本の状態と、現代の世相と比較しました。道徳の教科化や歴史教育の偏り、国家批判をすることを反日とするムード、「イスラム国」などの世界情勢などを挙げ、「悪について考えざる得ない」と危惧されました。「悪とは、無である」とし、「余りに空虚です」とかたられまし

た。人々が悪に染まる理由について、次のように述べました。「グローバルな経済のシステムの中で、金銭欲に溺れ悪霊なる神に仕えることが多くの人の生きる目的となっている。一方甚だしい格差、貧困で傷つき、生きる術のない人がいる。空疎さを生めるため、テロ、暴力に走る。若者は、満たされないものを抱え国家に寄りかかり、靖国参拝、偏った差別発言に熱を上げる。これはフランスの移民排斥、ドイツの反イスラム運動、ネオナチにも通じます」と言われました。

又、「国体」や「日本人」も正確なものだとして、「空疎さを満たすものは神の愛」であると強調しました。「近代国家をもたらし、自由・平等・博愛の三つ。だが現実は格差が存在し、友愛がずたずたに引き裂かれている。自由と同時に平等と博愛が語られなければならぬ。追い詰められた若者たちは『イスラム国』に向かう。愛なくして、我々の信仰は成り立たず、国家に対抗する力は与えられません」と言われました。

さらに、戦後日本の格差の問題、日韓問題に触れ、「いかにして国と国との和解に向けてイエスの愛によって結びつくことができるか。身の回りにある生の空虚さ



を抱えた人にどのように向き合っているかが問われている。歴史は繰り返される。戦後七〇年の今年、福音で結集し、孤独ではない、という思いで一年を過ごしたい」と結ばれました。

質疑応答では、さらに北朝鮮や東アジアの和解について言及。「朝鮮半島の民族だけでは統一は困難。国を超えた枠組みで半島周辺を含む6か国で協議し、和解を実現することで、拉致問題も大きく前進できるだろう。日本の安全保障にもいい意味をもたらし、沖縄基地負担問題、中東問題に対しても貢献できるだろう」と述べました。

そのほか戦後日本は、韓国や台湾の民主化で、安保状況が変化し、日本の軍事化が進んでいる状況を説明。広島・長崎の原爆や沖縄問題などにも触れて「歴史問題解決には日米関係の正常化が必要」と東アジア問題におけるアメリカの存在に注意を促しました。非常に幅の広い実り豊かな講演でした。

参加五一教会・二四一名。

### 各教会の社会活動

(第二回活動委員会で報告された中から抜粋)

- 埼玉大通り教会
- 学習会「戦争と罪責」野田正彰著、「罪責告白Q&A」、「キリストこそわれらの平和」隔ての壁を取り壊す」関田寛雄牧師の講演記録から学ぶ ● 沖縄からの平和メッセー ジ・知念さんの講演参加
- 埼玉和光教会
- 支援、協力・東日本大震災救援、山谷兄弟の家伝道所・まりや食堂、和光市心身障害児・者を守る会、J OCS、隠退教師を支える運動、障害者福祉施設 ● 憲法・平和学習会・講師稲正樹
- 大宮教会
- 支援、協力・東日本大震災救援、キングスガーデン、仙台エマオボラ ンティアのための食事づくり、古切手の収集 ● 「信教の自由と平和を守る二・一一集会の開催
- 上尾合同教会
- 支援、協力・山谷兄弟の家伝道所、まりや食堂、フィリピン台風被災者救援、仙台エマオへの調理ボランティア奉仕、● 平和祈念集会で話し合い
- 本庄教会
- 支援、協力・アムネスティインタ ナショナル、東日本大震災救援 ● 本庄九条の会へ参加、「集団的自衛権

公使反対署名 ● 障害者週間を覚えて礼拝で祈りと献金

- 和戸教会
- 講習会に参加し、それを基に教会内で学習会(八・一五講演会、聖学院平和集会) ● 教会懇談会「教団罪責告白を学ぶ」
- 川口教会
- 障害者施設、高齢者施設への慰問、● 北村慈郎教師免職問題などへの取り組み ● バザーを開催し施設へ支援

### 社会委員会報告

◎ 第二回社会活動委員会。引き続き第四回社会委員会。引き続き 日時・一〇月一九日(日) 一五時～一九時

場所・浦和東教会 (社会活動委員会) 出席二一名

● 学習会・「非戦平和の原点を求めて、非戦平和に生きた先達に学ぶ・小川武満の生活」講師・清水与志雄牧師

● 各教会の社会活動について報告会(8教会)

(社会委員会) 出席七名

● 各小委員会報告

● 二・一一集会について

講演・姜尚中氏(聖学院学長)

場所・聖学院チャペル

● 第3号「埼玉の夜明け」原稿依頼について

◎ 第五回社会委員会 日時・一月八日(日) 一五時～一七時

場所・川口教会

● 各小委員会報告

● 「埼玉の夜明け」編集について

・会計状況について他

● 二・一一集会の具体的準備についての話し合い

● 本年度の反省と新年度の人事等について

◎ 第四五回、信教の自由を求める 二・一一集会 日時・二月一日(水・休日) 午前一〇時～一二時

場所・聖学院大学礼拝堂

講演・姜尚中氏(聖学院学長)

演題・「悪と愛について」 (参加者・二四一名)

### 編集後記

安倍政権の国民を無視した独断先行の政策を危惧する。憲法改正問題、原発再稼働問題いづれも、日本の将来にとって重要な事を、国民の多数の意見に耳をかさず、完全に無視した形で強引に進めている。

昨年七月、集団的自衛権の憲法解釈の変更を閣議決定で行ったが、そしてここに来て、自衛隊の海外活動を米軍以外の防護等にも広げ、しかもこれを恒久法とするものだ。(浅子)